霧降る夜

Blackfruits

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霧降る夜

【Ｎコード】
Ｎ７０４６Ｋ

【作者名】
Ｂｌａｃｋｆｒｕｉｔｓ

【あらすじ】
生きる気力を無くした青年は見知った夜の街を歩き続ける。
この日はやけに霧が濃く、それでも何かに惹き付けられるように霧の中を歩く。
そこにあるものは、一体何なのか。

（前書き）

※この物語はフィクションです。

どこにもない。
もう何度、この道を歩いたのだろうか。
多くのネオンがぎらぎらと夜を彩り、人が舞い踊るかのような都会の道。
でもそこに存在するのは一時の愉悦を求める肉の塊たちだけ。
　男は嘲笑した。
同時にそれは自分に対しての嘲りでもあった。
生きるすべはきっとたくさんある。
仕事も探せばきっとある。
でも、本当にそれは生きていることになるのだろうか。
自分には、やりたいことなどない。やるべきこともない。
この都市で働く者を遠くでみながら、心のどこかで嘲笑っていた。
この都市を歩く者たちを、虫けらのように思っていた。
自分たちが築いた秩序に縛られていくちっぽけな存在だと。
　でも、本当は自分が一番そうなのだ。
馬鹿にしながら、自分が一番この世界に求めていた。
自分の居場所を。
　煙草を探そうとスーツのポケットを探ると、自分の名刺が一枚出てきた。
『荒木昴』と書かれた名刺だ。
「あらき…すばる」
昴は自分の名前を反芻してみた。
自分と同じ名前はこの世界中でどれだけ存在するのだろうか。
それだけ自分の替えが効くということなのだろうか。
よくドラマとかだと、命の替えがないとか、自分はこの世界で一人だけだとか、そんな感じの話を聞く。
でも、実際それは詭弁だ。

それが例え自分でなくたって、どんな人間だって他の人間の代わりになる。
もし、そうじゃないって言うなら、誰か証明してみせろよ。
　視界の奥が、ぼんやりと白く見えた。
もう何度も通り慣れている道の先が、白くてみえなくなっていた。
昴は眉をひそめた。
霧だろうか。それにしてもとても濃い。
それでも足を止めずにまっすぐに道を歩く。
次第に周りの景色がよくみえなくなって、ネオンさえ隠れてしまった。
こんなに濃い霧の夜は初めてだった。
昴はほんの少し立ち止まった。
ゆっくりと後ろを振り返る。
だが、もと歩いてきた道でさえもはや霧に覆われて見えなくなってしまっていた。
自分の止めた足先の方向を、昴は目を細めて見やる。
　誰かがいる。
黒い影がこちらに向かって手招きしていた。
なんだか気味が悪い。
だが、いつもの散歩によほど退屈していたのか、昴はその黒い影の後を追っていた。
　自分がこんなに危ない奴だとは思わなかった。
見知らぬ誰かの手招きについて行くなんて、馬鹿にもほどがある。
でも、どうしてかついて行こうと思った。
　黒い影は様々なところで待っていた。
ぐねぐねと道を曲がりながら、昴はそれを追って行った。
ときどきその影の手招きが「早く早く」と言っているように思えた。
　手招きと言えば、小さい頃自分に手招きをしてくれた奴がいたな、と思う。
あれはいつの頃か。確か、小学生だったころか。

ランドセル背負った坊主頭の男子と、いつも髪を二つ結びに結っていた女の子。
手招きしていたのはいつもその女の子だった気がする。
誰だったか、名前は覚えていないが…
　霧がさあさあと自分の肌を濡らしているような気がした。
全部濡らして、全部洗い流してくれればいいと思った。
ここで大雨でも降れば、もっといい。
　俺はなんでこうなったんだろうな。
生きていたくないと思った。
なんのために生きるんだろうと思った。
どうして生まれてきたのだろうと思った。
みんな、生まれてきたことに後悔してないのだろうか。
こんなに大きな空の下で、地面に這いつくばって、泥だらけになって、泣いて笑って怒って。
でも、何も残らないのに。
苦しんで、乗り越えても、何もならないのに。
死ぬために生まれてきただけじゃないか。
虚しい。
　影はまた手招きした。
どこまで行くのか、どこへ行くのか。まったく分からない。
それでもここまで追ってきたのだから…
もはや自分の意地のために昴は影を追いかける。
もう歩くのではなく、走っていた。
　そういえば、初めて上京した時もこうして走った気がする。
　思えば、上京してきて6年になるのか。
高校もあんまりうまくいかなくて、親にもどれだけ怒られたか。
親に恥をかかせるなと、どこでもいいから有名な大学に入学して。
単位を取得するために上辺だけの友達関係を続けた。
それでもここまでやってきたのは、本当に意地だった。
気が狂いそうなくらいつらいことがあっても、一人で抱え込むしか

ない。
　みんな、なんのために生きるんだよ。
理由がないのは俺だけなのか？
やりたいことがあっても、それが将来何になるっていうんだ。
結局みんな死ぬじゃないか。
残るものなんてないじゃないか。
　突然、何かにつまずいた。
転びそうになったところを、とっさに右手が何かをつかむ。
そろそろと足を前に出すと段があるようだった。
昴が目の前をみやると斜め上の方で、黒い影が手招きした。
昴はそれを追いかけた。
歩くよりもゆっくりと足を進める。
かん、かんと足元が音を立てる。
　待っていた影の方に歩みを進めると、影が手招きをやめた。
昴は立ち止まった。
　さあ、と霧が彼の顔を覆う。
突然、視界が開けた。
「……」
昴の足が反射的に引っ込んだ。
彼は息を飲んだ。
開けた光景に、彼は瞠目する。
心臓が強く跳ね上がって、どくどくと音を立てる。
　しばらく黙っていたが、思いがけなく笑みがこぼれた。
「これが、ゴールか…」
　古びた建物の屋上と思われる。
すぐ下には、一面コンクリートに覆われた地面が真っ黒に見える。
黒々とした闇が、大きく口を開けて笑う。
　だったらここから死んでみろ、と言っているようだ。
昴はその闇に向き合った。
　ここからなら、よく飛べる。

間違いなく、確実に死ねるだろう。
　手招きしていた黒い影が死神のように思えた。
もしかしたら、自分にだけみえていたのかもしれない。
　昴は錆び付いた不完全な手すりに体重をかけた。
これは、チャンスなのかもしれない。
ここから逃げるためのチャンス。
あんまりにも無気力な俺に神が与えた素晴らしい機会。
あるいは、あまりにも人間として不躾な自分に愛想を尽かした結果なのか。
いずれにしても、昴にとってはチャンスだった。
もう、疲れていたから。
　頭の中で「恐くないのか」と問いかける声がした。
飛び降りたら、きっと痛い。
死ぬような痛みなんて、きっと今まで経験したことないくらいだろう。
　ほんの少し、手が震えた。
落ちつけ、と昴は自分を奮い立たせた。
死ぬ痛みなんて、きっと一瞬だ。
　ごくりと唾を飲み込んだ。
全体重をかけて――
「何やってんの！！」
チャンスは遮られた。
一瞬の出来事だった。
頭に突き刺さるような強い声が、昴が今しがたやろうとしていた行動を止めてしまった。
「あ…危ないからやめなさいよ！ちょっと、こっちきて！」
昴はゆっくりとそちらを振り返る。
スーツ姿の女性が困惑したような表情でこちらに向かって手招きしている。
まさか、自分以外にこんなところに人がいるとは思わなかった。

邪魔されたような気がして、いらいらした気持ちで昴は目を細めた。
女性は「早く早く！」と手招きする。
「何があったか知らないけど、自殺なんてするもんじゃないわよ。
とにかくこっちきて」
女性はゆっくりとこちらに向かって歩いた。
そして、突然ぴたりと止まった。
「あれ？」
止まったかと思うと今度は素早くこちらに向かってくる。
予想外の行動に、昴は何もできなかった。
「昴…君？」
彼女の不思議そうな言葉に昴は固まった。
そして、突然彼女の姿が自分の中の記憶のピースにかちりと当てはまった。
「さ…え？」
思いだした。
俺は彼女を知っている。
小学生の時よく俺を手招きしていた、あの少女だ。
　二人はしばらくそのまま立ち止まっていた。
霧はまるで嘘のように晴れている。
「なんでここに、いるんだ」
　自分でも驚くほど掠れた声が出て、そのことがなおさら自分を驚かせた。
彼女も驚いているのかすぐには返事をしなかった。
　人間はちっぽけだ。
だから、大きなものに憧れる。
奇跡とか希望とか、見果てぬ夢をみる。
奇跡も希望も、俺は望むことをやめた。
だから何が起きても、絶望することはあっても、驚く様なことはない。
そう思っていたのに。

この時ばかりは、ひどく驚いていた。
　霧の晴れた空は、雲ひとつない。
結局、霧の中の黒い影はなんだったのか。
どうして、冴と俺が今出会ったのか。
霧降る夜が俺にもたらしたのは一体なんだったのだろうか。
この時ばかりは、何もかもがわからないままだった。

（後書き）

短編小説第一作品です。
初めての短編作品なので、読みにくいところがあったり、表現に工夫が足りなかったりしますが、徐々に上達出来たらいいな、と思います。
面白い作品いっぱい書けるようになりたいな。
　最後になりますが、読んでくださった皆様方に、感謝をこめて。
ではでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7046k/

霧降る夜

2010年10月11日16時06分発行